福音が必要なわけ　　イザヤ 53:1～６

毎年イースター（復活祭）までの４０日間はレント（受難節）と呼ばれて、信仰者は主イエスの十字架と復活を覚え、主の前に心整えられる時期を過ごします。今年は２月１７日からレントに入っています。特に今日取り上げましたイザヤ書の箇所には主イエス・キリストの受難についての預言が書かれています。少し、イザヤ書について説明しておきますがイザヤ書はとても不思議な書物です。聖書全体が 66 巻から成り立っているように、イザヤ書も 66 章から成り立っています。聖書の最初の 39 巻が「旧約」で、残りの 27 が「新約」ですが、イザヤ書の第 1 章から 39 章は、いわば旧約的な内容で、40 章からは、それまでとは違った新しい主題が語られます。ですからこれを違う人が記したという人もいます。つまり、40 章から 66 章までの 27 章はとても新約的なのです。それを見ますと聖書全体とイザヤ書には不思議な調和があることに気づかされます。

イザヤ 40 章以降には「贖う」という言葉が繰り返し数多く出てきます。「贖う」というのは売りに出されていたものを買い戻すという意味です。イザヤ書では、「贖い」とは、直接的には、国が滅んでバビロンに連れて行かれたユダヤの人々がバビロン捕囚から解放され、祖国に帰ってくることを表わしていますが、それは同時にイエス・キリストの十字架の贖いの預言となっています。ですからイザヤ書の後半、40 章以降は、新約聖書と同じように、救い主による贖いを主題としています。

イザヤ書には、受難の預言以外にも、イエス・キリストについての重要な預言が数多くあります。イエスが処女から生まれること（7:14）、ダビデの王座を継ぐこと（9:7）、バプテスマのヨハネが道備えをすること（40:3-5）、心砕かれた者をいやすこと（61:1-2）などです。しかし、イザヤ書が最も詳しく預言しているのは、イエス・キリストの受難であり、イザヤ 53 章で、イエスの受難が、詳しく描かれています。各節を見て見ましょう。

1 節に「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか。」とあります。これはイエスは約束された救い主として、ご自分の民のところに来られたのに、人々はイエスを信じ、受け入れようとはしないことが書かれています。

2 節の「彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。」という言葉はイエスが貧しさの中に生まれ、育たれたことを言っています。

3 節と 4 節の「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。」という部分はマタイ 8:17 に引用され、イエスは苦しみの中を通りながら福音宣教されたことが記されています。

7 節の「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」はペテロ第一 2:22-23 に引用されています。イエスは、裁判の時、人々が次々とイエスを責め、罵るとき、それに反論することなく、黙って耐えられました。十字架の上では、ご自分を罵り、苦しめる人々のためにさえ、神に赦しを願い求められました。

8 節の「しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。」というのは、総督ピラトがイエスに罪を認めなかったのに、彼が群衆の声に負けてイエスを十字架に引き渡したことを指し

ています。

イザヤ書には他にも数多くの預言が記されています。今は、聖書研究の時間ではありませんので、これ以上に詳しいことはお話ししませんが、イザヤ書53章だけで預言について一冊の本が書かれているほど、多くの内容を記されています。聖書の預言が、細かい部分にいたるまで、正確に成就していて、怖いぐらいです。聖書なのだから当然だと言えばそれまでですが、イエスの十字架から800年ほど前に、こんなにも正確にキリストの苦難を描かれていることに、聖なる畏れを感じずにはおられません。

しかし、聖書がこんなにも詳しくキリストの受難を預言しているのはなぜでしょうか。それは、キリストの受難こそが、わたしたちを救うものであり、聖書の主題だからです。

さきほど見たように、イザヤ書の預言は、イエスのご受難を見事に描いていて、それは新約と一致しています。しかも、その一致は、イエスの受難についての見える部分だけの一致ではありません。イエスの受難の意味や意義についての一致です。預言の言葉は、一貫して、救い主が、人の罪を背負って、その身代わりとなって苦しみを受けられると言っています。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。」（4 節）「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」（5 節）「主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」（6 節）これらは、イエスご自身が「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」（マルコ 10:45）と言われたのと同じです。イザヤ書は、イエスの受難が罪人のための身代わりであること、人は、イエスの苦しみと死によって救われることをあらかじめ語り伝えているのです。イエスの受けられた苦しみによって私が罪赦され、救われるということは私の罪がイエスを苦しめ、死に追いやったということです。そんな残酷なことを私はしないと言うならそれは自分の罪があまり分かっていないと言うべきかもしれません。それなら誰が私の罪を赦してくれるというのでしょうか？　主イエスが十字架に架かられたのは私の罪を赦すためでした。私たちは加害者意識を持った時に初めて赦しを求めます。赦してくださいということばが出てくるのです。

わたしたちは毎年、イースターにむけて、レントの四十日にイエスの受難を深く覚えようとします。それは、これこそが聖書の主題であり、ここにこそわたしたちの救いがあるからです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネのどの福音書も、その三分の一を、主イエスのご生涯の最後の一週間を描くのに費やし、主イエスの復活を告げ知らせて締めくくっています。初代教会は、イエス・キリストの十字架を語り、キリストの復活を証ししました。これこそが、聖書の主題であり、聖書の他のどんな教えにもまさって大切なものだからです。すべての人は、イエスの身代わりの死によってはじめて罪の赦しを得、イエスの復活によって、新しいいのちに生きることができる、人は、ほんとうの意味で、生かされるからです。

聖書は「人生の問題」を扱っています。人生の問題というと、どの学校に行くか、どんな仕事をするか、どの会社に就職するか、誰と結婚するか、どんな家庭を築くのか、どのように社会に貢献するのかなどを、ふつうは、考えます。どれも大切なことです。しかし、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たせられた時には、そんなことよりも、まず生きること、生きる力を得ることを願います。子どもが病気になった時には、親は「勉強しなさい」「立派な人間になりなさい」とは言いません。まずは病気がよくなって、元気になるようにと願います。そのように、聖書は、人生の問題を、「生きる」とはどういうことなのか。人は、なぜ、何のために「生きる」のか、生きる力、命はどこから来るのかという根本的な問題の解決からはじめています。それが解決されなければ、「どのように」生きるかということも定まらないからです。聖書

の主題は、イエス・キリストの十字架と復活が、私たちを本当の意味で生かし、人生の問題に根本的な解決を与えるということです。

「なるほど」と思わせる話を聞くとわたしたちはそれに頷きます。感動的な話を聞くと涙を流すかもしれません。しかし、そうした知的な興奮や感動は時間とともに消えていきます。しかし、イエス・キリストの十字架と復活の知らせは、どんなに時間が経っても、時代がかわっても、消えていくもの、薄れていくものではありません。何度聞いても、読んでも、主イエスの十字架と復活の知らせは、わたしたちの心をゆさぶります。それは信じる者の生きる力、いのちそのものだからです。このキリストの死と復活の物語、「福音」によって、人は、はじめて、生かされます。何は無くとも、どうしても私には福音が必要なのです。

ぜひイザヤ 53 章を心静かに読み、黙想していただきたいと思います。そして、週報にも掲載しましたが「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」（ローマ 4:25）との真理を確信したいと思います。ひとりひとりが、ローマ 4:25 の言葉の「私たち」を「私」に置き換え、「主イエスは、私の罪のために死に渡され、私が義と認められるために、よみがえられたからです。」と言い表わして、神をあがめたいと思います。